

審査の結果の要旨

氏名 岡本 倫典

ルネ・ゲノン (1886-1951 年) は、近代西欧文明を根底から批判し、始源の原理への帰依を説いたフランスの特異な思想家である。アンドレ・ブルトンやレーモン・クノーといった作家たちもその熱心な読者に含まれるとはいえ、ゲノンの著作は徹底してエズテリック (秘教的) な姿勢ゆえに広く知られてはおらず、とりわけ日本においてはこれまでほとんど紹介、研究の対象となつてこなかった。本論文はその欠落を埋めるべく、入手できる限りの作品を読み解いたうえで、彼の思想の根幹を支える概念を明らかにした、パイオニア的な意義をもつ研究である。

全体は序論および三つの章からなる。序論では、ゲノンの文学・芸術に対する姿勢を知る上で重要な『ダンテのエズテリズム』を取り上げ、「知なき術は無である」とするゲノンの芸術観が分析される。ゲノンが追究する、芸術の形式を通して初めて表現可能となる知とは、個人の思考を超越し、象徴表現によってのみ伝達されうる知であり、伝統教義の伝える「智慧」と重なりあう。「智慧への愛」ではなく智慧そのものの探究として定義されるゲノンの思考は、西洋を離れ東洋の形而上学へと向かう。

なぜ東洋なのか、そしてゲノンにおいてはエズテリズムと同義となる「形而上学」とは何を意味するのかが、第1章で掘り下げられる。ゲノンが重視するのは、あらゆる偶有的な条件を凌駕した、超越的な起源を有する教えの伝統であり、アジア起源の各宗教の研究をとおし、彼は「諸伝統の超越的一元性」を措定する。それを見失った近代以降の西洋に対し、改めてこの伝統を説き明かすことを彼は自らの使命とした。そのとき彼のいう「形而上学」とは自然学の彼方、現象的なものの彼方に位置づけられる。日常的言語によりその特質を記述することは困難だが、オキュルティズム、科学、あるいは哲学といった知の諸形態との根本的差異を緻密に分析していくことにより、「万物の第一原因」への遡及として成り立つゲノンの形而上学=エズテリズムの論理が抽出される。

神による世界の創造を核心に据えた諸宗教とゲノンの思想が決定的に異なる点は、「顕現」の概念をとおして考察される。第2章では、ゲノン初期の重要なテキスト「デミウルゴス」から出発して、世界は原因たる原理の結果として、いかに顕現すると考えられるのかが検討される。存在理由を内に持たない何物かが存在することはあり得ない以上、顕現はそれを超越する原理の外部に独立してあるのではない。あらゆる二元論を退け、「否定の否定」として顕れる存在原理の特質が浮き彫りにされる。

第3章ではさらにその原理を「顕現」の側から捉え返し、多数性、あるいは二元性によって特徴付けられる顕現世界はいかに可能であり得るのかが、宗教的な「原罪」の観念と照らし合わせながら考察される。ゲノンによれば「一」より「多」への移行こそは、「原罪」をめぐる古今の象徴の意味するところにほかならない。しかも存在はつねに存在理由たる原理に与っている以上、人間の生は「贖罪」の可能性そのものとしても生きられうる。そこにゲノンの思想における希望もまた見出される。

審査では、ゲノンを同時代のコンテクストの中に位置づけるパースペクティブの不足や、「論点先取」的な批判の余地を感じさせるその主張に対する、より客観的な視点の必要が指摘された。しかし、謎に満ちたゲノンの全体像を、資料を博捜し縦横に読み解いたうえで、明晰な文章で論じ切った力量を高く評価し、審査委員会は本論文が博士 (文学) の学位にふさわしいものと判断する。